

昭和大学藤が丘病院 30 周年記念誌

薬局

薬局長 齋藤正志

歩み

昭和 50 年 7 月 28 日の診療第一日目、外来処方箋 22 枚から薬剤師業務はスタートした。その後、外来患者数の増加とともに処方枚数は急激に増加し、1 日外来 1,000 枚、入院 300 枚を超える処方箋の調剤に多忙を極めていた。

そうしたなか、外科医師の要望もあり、昭和 56 年 6 月から 5 階外科病棟での注射薬個人調剤と高カロリー輸液（TPN）の無菌調製を開始し、順次拡大を図った。平成 6 年の診療報酬改定による無菌製剤処理加算の新設に伴い、薬剤部内にクリーンルームを設置し、現在は調製依頼のあったすべての患者に対して TPN の無菌調製業務を実施している。

また、薬事法「医薬品の臨床試験の実施に関する基準」（GCP）の施行に伴い、昭和 63 年 12 月からは IRB（臨床試験審査委員会）事務局を薬剤部に設置し、平成 16 年度末現在で 181 回の委員会開催と 1,633 件の治験薬審査に関する事務局業務を行っている。今後は、治験がより倫理的・科学的に実施されるよう、IRB および事務局の機能を充実させるとともに、治験の適正な実施と症例確保のために、薬剤師が担当する治験コーディネーター（CRC）業務（392 症例実施）をさらに拡大していく予定でいる。

昭和 63 年には診療報酬に薬剤管理指導料が新設され、翌平成元年からは 9 階眼科病棟で薬剤管理指導業務を開始した。段階的に業務を拡大し、現在の指導件数は月平均 1,100 件を超えている。

こうした薬剤師業務の拡大への対応と病院経営の面から、平成 5 年 6 月より眼科から段階的に院外処方箋の発行を開始した。その後、内科を含め全面的に院外処方箋発行へ移行し、現在の発行率は 97%前後で推移している。

また、平成 14 年 2 月からは処方オーダーリング、翌年 3 月には注射オーダーリングも開始され、処方時や調剤時の過誤防止のため、オーダー機能に薬品名の誤入力防止、投与量の上限設定、併用禁忌薬の処方防止、他科での重複投与防止など、安全性を重視した機能を持たせるための薬品マスタのメンテナンスを薬剤師が実施している。

開院時、新井君子薬局長以下 7 名の薬剤師でスタートした業務は、二代目の富田恵子薬局長、三代目の川上かつみ薬局長の時代に患者数の増加とともに拡大し、最大で 50 名の所帯となった時期もあった。しかし、院外処方箋の発行や昭和大学横浜市北部病院の開設などに伴い減員となり、現在は 31 名の薬剤師で業務を担当している。

教育面では、毎年多くの薬学生などの教育を担当しており、最近では薬学部大学院生の

病棟での臨床実習を含め、年間 100 名近くの学生教育を担当している。また、病棟での薬剤師業務やオーダーリングシステム、薬剤調製などの業務改善を図り、その知見を日本薬学会、日本医療薬学会、日本臨床薬理学会など、さまざまな学会で数多く報告を行っている。

最近の取り組みと展望

今、薬剤師に期待されているのは、医薬品に関連する事故をいかに未然に防止するかであり、そのためには従来からの医薬品の管理方法や医薬品の供給体制を見直していく必要がある。

平成 16 年度、薬剤部では従来から実施してきた高カロリー輸液（TPN）の無菌調製の範囲を拡大して全病棟で実施した。また癌化学療法における安全確認のため、投与量や投与間隔などのレジメンチェックを入院・外来患者に対して実施するとともに、外来点滴センターで施行する患者に対しては、薬剤師による無菌的混合調製を平成 17 年 2 月から開始している。

現在は、医薬品の安全管理に関する業務を最優先し、癌化学療法における無菌調製を入院患者にも拡大すること、また、手術室で現在行っている毒薬・向精神薬などのセット交換法を改善し、薬品管理の範囲を拡大していくための取り組みを行っている。